

風間博夫『動かぬ画鋏』を読む

—奥村晃作『スキーは板に乗ってるだけで』とのテキストマイニングを用いた比較を通して—

早川 晃央

風間博夫の作品は、しばしば「ただごと歌」、「気付きの歌」として、奥村晃作と同じ系統に分類される。ここでは、風間博夫歌集『動かぬ画鋏』と同年に出版された奥村晃作第十歌集『スキーは板に乗ってるだけで』の共通点や相違点を、テキストマイニングを用いながら、分析する。

テキストマイニングと短歌

二〇二〇年、「いぬのせなか座」HPに、吉田恭大歌集『光と私語』について、テキストマイニング分析を用いた考察がアップされた。歌集中の語句の頻出度、各品詞の割合、句切れの特徴、定型の歌数など、多面的に歌集を分析している。それによると、吉田の歌集は、一人称や三人称はほとんどなく、「あなた」という二人称が多用されていることや「ある」という言葉の二倍、「ない」が用いられることで、「この歌集では、何かが失われ、消えている。作中主体は、明示されない制度に禁じられ、義務づけられる。作中客体には、できないことがあり、したくないことがある。そのような場面がしばしば描かれる」と評されている。

これを吉田恭大と年代や結社、まったく作風の異なる風間

作品(図1)や奥村作品(図2)で行うとどうなるかに興味があり、この手法を用いることとした。

風間作品と奥村作品で用いられる一人称

作中に、風間も奥村も二人称を用いることはほぼなく、一人称を多用する。それは図1・2それぞれの中心に比較的近いところに「われ」があることからわかるだろう。ここでは、「われ」だけが図中にあるが、「我」「吾」も見られた。

特に奥村の場合は、「オクムラ」「ボク」など様々な表記があることも特徴の一つといえる。短歌は一般的に、「一人称の文学」であるという考え方はいまもって根強い。それゆえに主語がなくても、ふつうは「作中主体＝作者」であるという見方をするのが基本である。それにも関わらず、一人称が多く出てくるというのは、吉田作品とのちがいであり、二人の共通点といえよう。まずは奥村作品から二首挙げる。

スノボーのガガガガガのガガ滑り危うく
われは接触を避く

バランズと速度の遊び 我は我 我のレベルのスキー楽しむ

主体は間違いない、作者である自分自身だと強調することで、自身の気付きや感動をメタ認知している。特に二首目。イラク戦争の報道に触れての歌である。イラク戦争を主導したサダム・フセインとの共通点を見出した奥村が、一人称を「オクムラ」と表記している。「フセイン」と「オクムラ」の片仮名四字の表記、そして「オクムラ」のリフレインが強いインパクトをもっている。

一方の風間作品には、「われは」のように一人称に助詞の「は」や「が」が用いられる作品は少なく、前述の宝くじの歌のように「われの」や「わが」と助詞と合わせて用いる歌が多い。

テーブルに折りたたみ置くわがメガネ目の
あるごとく天井眺む

妻の箸、子の箸、われの箸洗ふ 使ひ終は
つてみんな一緒に

一首目はどこか怖い雰囲気のある歌である。メガネがあり、天井を眺むように置かれているというだけだが、「壁に耳あり障子に目あり」という言葉を連想させ、作者がいない間も部屋の様子を見ているといっているようである。二首目は食事が終わった後に家族全員の箸を洗う光景である。確かに洗っているという点は、誰のものでも関係なく、食器入れに置かれていくという点で、納得させられる一首である。

一・二首目は主眼が「われ」ではなく、それぞれメガネや箸に向けられている。これらの点から、奥村は「われ」を作中主体や主人公として用いて比較的ピントが「われ」である

奥村自身に向けられているのに対し、風間の「われ」は説明や意味の補足的に用いることが多く、「われ」が捉えた「もの」にピントが当てられるタイプといえそうだ。

奥村らしさと風間らしさ

奥村の主張の強さは、助詞だけでなく、動詞にも現れる。風間短歌にはなく、奥村作品にのみ現れる特徴的な動詞が「思う」である。短歌で「思う」という動詞を用いることは多くない。

奥村自身も歌は感動を詠むものであるという主張を繰り返している。それであれば、「思う」とわざわざ言う必要はない。しかし、あえて「思う」と用いることで、一首の勢いや力強さを出し、メッセージ性を強める効果があると考ええる。

アレホドノ快ホカニナシ止めちゃった煙草
の功を折ふし思う

運転手Tならずともこの事故は起こったか
もと思えて来るわ

一首目は、スモーカーだった過去を想起して、煙草の「快」を際立たせつつ、結句を「思う」で止めている。また、三句の「止めちゃった」の口語と結句の冷静な自分の対比も効いている。二首目は、JR福知山線での脱線事故の歌。定時運行をよしとすることへの暴走に対し、事故を起こした運転手への寄り添う心情が読み取れる。この歌も、四句目まで主張はされている。しかし、「思えて来るわ」を置くことで、運転手への同情や起きた事実を消化しようとする姿勢が

読める。

一方、風間作品に見られる特色は、大きく二つある。一つは大胆なルビの用い方、もう一つは動作を丁寧すぎるくらい丁寧に切り取って、「気付き」を見出すことである。

重症急性呼吸器症候群だから四つの頭文字順に並べてSARSとぞ呼ぶ

歯ブラシの山山部分の変形のまま異なり子らの歯ブラシ

「渡す、取る、切る、渡す、取る」↓「入れる、取る」↓「触れる」Sujicaは手に持ったまま

最初の二首は特徴的なルビを用いた歌であるが、特に一首目は、風間作品の真骨頂といっても過言ではない。本来は感情を入れず描写に徹することの多い「ただごと歌」であるが、ルビに思いを入れ込むところが風間作品の「らしさ」であり、魅力である。

二首目は独創的なルビと視点。歯ブラシの歯の開き具合を視覚的に面白く詠んでいる。一般にルビは、正しい読み方をしないものは嫌われる傾向にある。しかし、風間はそれを逆手に取り多くの人が思う感情をルビで表して、一首に説得力をもたせている。

三首目は風間の観察眼が光る歌である。動詞は「」でつなぎつつ、技術革新による時間軸の変化を↓でつなぐことで、視覚的に楽しめる一首となっている。また、四句目までに乗客と駅員、乗客と自動改札機の動作を正しく丁寧に描写する

ことで、小刻みな心地よいリズムを作り出している。少しづつ動詞の数を減らしていくことで、技術革新による利便性の高まりを訴える効果もある。

「短歌人」に所属する近藤かずみは自身のブログで、奥村作品を「発見の歌」と言ったのに対し、風間作品を「ナットク短歌」としたらどうかと提言している。それは、奥村が図2中に「フセイン」や「イラク」といった語があることからわかるように、時事詠や未知のものとの出会いによる感動を詠むことが多いのに対し、風間は既知の事象を別の視点から見ることによる気付きを歌にするからではないだろうか。そのため、図1中の名詞を見ても、固有名詞は「コロンビア」だけであり、一般名詞が並ぶ。今回比較に用いた風間作品は、二〇〇五年発行の第一歌集『動かぬ画鋏』からとっている。それ以降の風間作品の傾向を分析する意味でも、第二歌集の発行が待たれるところである。

今回用いたテキストマイニングはフリーサイトで、品詞ごとの分析や作品中に用いられる特徴的な語句をAIによって瞬時にはじき出す。まだまだ創作という点では実用化が難しい現状があるが、分析のツールとしての可能性は今回感じることができた。近年、私たちはこれらとどう向き合うかが短歌総合誌でも議論になっているが、ツールとして活用すること、これまで以上の作品分析が可能になるのかもしれない。